

女殺油地獄

道行みなれざほ

船は云々松の落葉卷四、君はしんぞ隨の句をとりたり
 武藏野の月一若緑卷四てる月の文句をとれり、武藏野は大盃の名
 登り一小菊にのぼせると天王寺塔へ登るとかく野崎詣一河内讀良郡野崎村の觀音一詣ること
 昔在云々一勝後の三世利益同一體を三年續きとかへたり一觀音

歌船ふねは新造しんぞうの乗り心こころ、サヨイヨエ、君と我と我と君とは、圖づに乗つた乗つて來た。しつとんとんくしとんく、しつと逢あせの波枕なみまくら。盃さかづきは何處どこいた。ランド君が杯さかづきいつも飲のみたや武藏野むさしのの、月の、月の夜すがら戯たがれ遊あそべ。はやし立たたる大騒さわぎ。北きたの新地しんちの料理茶れうりぢや屋や、主人あるじなけれど咲く花はなや、後家ごけのおかめが請まねこんで、客かの變名かへなは郎九らうくとて、生なれは陸あち奥會津おくあづにて、名なだいながさぬ金遣かねづかひ。此このころ比浪華たは此里さとへ、登のぼりつめたよ天王寺屋てんおうじや、小菊こぎくを思おもひ思おもはれたさに、なます川がわよりゆらくと、野崎のさき參まりの屋形船やかたぶね。卯月うづき中旬ちゆうかのはつあつさ、末すえの閨うらみに追繰おひぐりて、まだ肌寒はださかき川風がわかぜを、酒しゆに凄しびてそより行く。昔しやく在ざい靈りやう山せん名な法華ぽうが、今こん在ざい西方さいほう名な阿彌陀あみだ、娑婆しやば示現じげん觀世音くわんぜおん、三世さんぜの利益りやく三年續さんねんつづき、去々きよく年ねん戊亥つちのえの春はるは、うらやせどやに罪深つみふかく、針櫛箱はりくしほこや數珠袋じゆずぶくろ、そこそこに日ひの目めも見みず知しらぬ、一文いちもん不通ふつうの衆生しゆじやう迄まで、千せん

鐵法) 千手の云々千手觀音が救ひ取りて黄金佛となす
 薩埵—大心衆生の觀音の事
 散らぬ色香—娘達が著飾つて儀る
 得庵堤—徳にか
 夫に任せた云々—いくら色を商買にして居る身でも
 とりなり—なり
 町て云々—町風を胸高に縮めたるは小菊と一見判る故たまらぬとなり
 上れつ云々—上れにかく、附纏うて道て手問をとる爲猶更人の

手の御手の掴み取、紫摩黄金の御肌、忽ち那智の觀世音、去年は和州法隆寺、シテ聖徳太子の夕、千百年忌、ツレこれ又救世の大悲の化身。シテ續いて今年此薩埵、二人櫻過にし山里の、誰訪ふべくもなかりしに、老若男女の花咲きて、足をそらく空吹風に、散らぬ色香の伊達参り、大人童も歌ふを聞けば、歌行もちんつ、又來る人もちんつちりつて、チリテツテ傳を頼みの乗合船は、借切よりも得菴堤、共に舳を漕付て、余所も一つの船の中、客は是見よ顔自慢、やよ共すれば痴話ごとの、夫に任せた身の上も、人も恥かし氣詰りと、小菊は陸へ一飛に、びらりほうしのふかぐくと、眉は隠せどとなりなりの、町て名古屋の胸高帯は、小笹に露のたまられぬ。儉約算用世智辯も、人にこそよれ品にこそ、よれつ冷泉もつれつ道草に、人の言草ア、むつかしく、うるさく憎く嫌らしく、我供船を小手招き、歌「これの見さんせナ、愛宕の山にヨエ、ちんの煙が三筋立つ。煙がナちんの、ちんの煙が三筋立つ」四筋に別れ玉鉾の、是より辰巳奈良街道、丑寅隅は八幡道、玉造へは未申、西は元來し京橋や、野田の片町大和川、爰は名にあふ壽命の松、御代長久の岡山を、歌には忍の岡とも詠み、さらよ山口一ツ橋、渡して救ふ御願力、無量無邊のじゆふくかく、慈眼視衆生念彼觀音、しんとくだう者の御誓ひ、問ふも語る

隆口が氣になる
是の見さんせー
當時の流行唄
無量無邊云々
法華經普門品の
句を所々とりた
り慈眼視衆生
福壽海無量念
彼觀音力……
應以……身得
度者云々
ぶとーな茶

坊主持―道中荷
物を願香きめて
持ちあふを坊主
に逢へば持たぬ
人に渡す
よし〜ヨチ
のんこー細髪の
頑健なる風を云
しやーそれしや
じやと也

もゆく船も、徒歩路ひらふも諸共に、迷ひを開く腰扇、御堂に念珠を三重繰返へす。所
をとへば本天満町、町の幅さへ細々の、柳腰やなぎ髪、とろりとせいも種油、梅花紙ご
し荏の油、夫は豊島屋七左衛門、妻の野崎の開帳参り。姉は九ツ三人娘、抱手引手に見
返る人も、子持とは見ぬ花盛り、吉野の吉の字を取つて、お吉とは誰が名付けん。お清
は六ツ中娘。「母様ぶよが呑たい」も、折節傍の出茶屋見世、直爰借ります」とやすらひ
ぬ。是も同町筋向ひ、河内屋與兵衛、まだ廿三親がかり。同商賣の色友達、はけの彌
五郎、かいしゆの善兵衛、野崎参りの三人づれ、萬事を夢と呑みあけし、寢醒提重五升
樽、坊主持して北うづむ。奥小菊めが客と連立よし〜と下向するも此筋」と、のさば
り返つてくる道の、茶見世の内より、直中々與兵衛様、爰へ〜」と呼懸けられ、奥ヤお
吉様、子共衆連ての参りか。存じたら連に成まじよ物。七左衛門殿は留主なさるよか」
直いや此方の人も同道。二三軒寄る所もあり、追付爰へ見へる筈。お連衆もマア是へ。
平に〜」と強られて、奥烟草一服致さうかと、腰打かくるものんこらし。直何と與
兵衛様、御繁昌な参りではないかいの。よい衆の娘子達やお家様かた。アレ〜彼處へ
桔梗染の腰變り、島織の帯しやじやはいの〜」奥ソレ〜其處へ島縮に鹿子の帯、

女殺油地獄

中の風―天神姿

川御座―吳座船
一出入―談判
問ふには云々―
相手の詞の中に
容子が知れる豎
しんく―ほん
とう入子鉢―大きな
鉢に小鉢を多

棧たしかに中の風なかと見た。又一位見事ひやくにんみじでは有ぞ」直い如何様いかさま若わいお衆しゆが此この様な折をりに、あんな見事みじな者引連れ、贅ぜいの遣やりたいは道理。こな様も連立つれだちたい者がある。こんな折をりに新地しんちの天王寺てんわうじ屋小菊殿やか、新町しんまちの備前屋松風殿びぜんやまつかぜか。なんと能知ようしつて居るか。なぜ連立つれだちて参まゐらんせぬ」と、ばつと乗すればふはと乗り、奥おく残のこり多い天晴あつはれ今日けふは物の見事な事ことで、参まゐりの群集ぐんじゆに目を醒ささせふと、此中こゝからもがいたれど、備前屋松風びぜんやまつかぜめは先約せんやくが有ありて、囉もろひも貸かしもならぬとぬかす。天王寺屋てんわうじの小菊こぎくめは、野崎のさきへは方ほうが悪い、どなたの御意ごいでも参まゐらぬと云切いひきる。夫それに聞きて下され。小菊こぎくめが今日けふ會津あいつづの客きやくに揚あられ、早天さうてんから川御座かはござで参まゐりをつた。田舎者いなかに仕負しまひては此こゝ與兵衛たけが立たぬ。小菊こぎくめが歸かへるを待まちて一出入ひとでいりと、咄はなしの内うちから二人ふたりのつれ、腕うで押おもんで力りきみかけ、鬼共組おにどもぐみべき勢いきほなり。直それそれく問とふには落おちず語かたるに落おちると、利口りこうそうに夫それがしんくくの觀音くわんおん参まゐりか。喧嘩けんかしののら参まゐり。買かしやんすお山やまも傾城けいせいも、何屋なにやの誰たれ何屋なにやの誰たれと、親御達おやごがよふ知して、いとしほや「其方そちへは與兵衛たけめが間まがなすぎがな入浸いりひたて居をる。異見いけんして下され」と、私等わしら女夫めをとこに折をり入いて口説くちまごと。こちらの七左衛門殿しちざゑもんもいやらぬ事は有あまい。定さだめしこな様の心こゝろには、所ところこそあれ野のがけの茶見世ちやみせで、若わかい女子おんなのざまで、入子鉢いれこ鉢の様な面々めんめんの子共こどもの、世話計はかりやきををらず、小こさし出でたと憎にくかろが、此諸このしよ萬人まんじんの群ぐん

く入れたもの

こうとう一質素

しやうごん一莊
殿にて爲にたる
の意

物ごし一言葉つ
き
所帯じうて一所
帯じみてか

やつし云一物
しの名人は京役
者甚左幸左と也
やつちや一ヤン

ヤ
手ぐすね引一用
意して待かけ居
る貌
帆柱立一動かぬ

集を、突のけ押のけ目に立風俗。本天満町河内屋徳兵衛といふ、油屋の二番息子。茶屋くくのわけもろくに立ず、あの様見よと指ざしするが笑止な。こうたうな兄御を手本にして、商人といふ物は、一文錢もあだにせず、雀の巢もくふにたまる。随分稼いで親達の肩助けと、心願立さんせ。わきへは行かぬ其身のしやうごん。ハア氣に入らぬやら返事がない。姊おじや早ふ参らふ。道でこちの人に逢しやんしたら、本堂に待てるといふて下さんせ。茶屋殿過分」と、袂より置く茶の錢の八九文。四分におもく五分には、輕々しけの物参り、別れてお吉は通りける。悪性の上塗するかいしゆの善兵衛、「あの女は與兵衛が筋向ひの内儀様でないかい。物ごしもどこやら戀の有美しい顔で、扱々堅い女房じやな」與然れば年もまだ廿七。色はあれど數の子程生廣げ、所帯じうで氣がこうたう。よい女房にいかい疵。見かけ計でうまみの無い、飴細工の烏じや」と笑ひける。かくとはいかでしろうとの、田舎の客に揚られて、連て主人の後家交り、かはりちんつの國訛り。歌やつしは甚左衛門、幸左衛門が思案ごと、四郎三が憂ひ事。ちんつくちんちりつてつて、日本一の名人様、やつちや」と、響る歌より褒さする、金ぞ諸藝の上手成。「そりやく来たぞ」と三人が、手ぐすね引たる顔色。小菊遠目にはつと驚き、「申花車さ

騎

光だてー威光を
振廻す鬼門云々一方角
の縁にて與兵衛
の目玉の大なる
形容
そだてられーも
だてられゆつたーいつた
ちよがらかすー
茶にされる
どやー云々ー

ん、同じ道計氣が盡きる。始の船に乗りたいたいと、裾かい取て立やすらふ、さきに與兵衛帆柱立、跡に二王の張番立、二人與兵衛せくな。女郎と詰開いて男立い。會津蠟燭が光りだてしたら、此方二人が心切て、踏消してくれる」と、草履を腰に腕巻り。客は顛倒花車も下女もうろたへ、小菊を圍ふてうぞぶるふ。與小菊殿かつた。名染の河與がかるからは動せぬ」と、茶屋の床几に引すりすへ、「是賣女様やすお山様、野崎は方が悪い、誰様の御意でも參らぬ、と此河與と連に成を嫌ひ、すひた客と參れば方も構はぬか。其譯聞ふ」と理窟ばる。目玉の鬼門金神もなどやかに、小菊コレ河與様角が取れぬの。小菊といふ名が一ッ出れば、與兵衛といふ名は三ッ出る程、深いくといひ立られた二人の中。連立て參らぬも、皆こな様の最愛さゆへ。人にそだてられ嗟けられ何じやの。わしが心は誓文かうじや」と、ひつたり抱き寄せ染々呷く、色こそ見へね河與が悦喜。「エ忝い」と伸た顔付。客は堪らず傍にどうど腰かけ、「小菊殿お身は聞へぬ。いか成縁にか會津様程いとしい人は、大坂中に無いとゆつたぞよ。國本の外聞身の大慶と、大事の金銀を湯水の様に川遊び。ちよがらかされにや來申さない。其男が聞まへで、夕べの如く云はないけりや。どやー通り通りのむやくの關、二度と越し申さない。どふだく」と責せ

どや〜はとや
〜の誤 陸奥
出羽の中に行通
ふ山道をとや
〜通といひ其
山口の關をむや
〜といふ
もさめー田舎者
奴(俚言集覽)
ぶい〜こが
ね蟲、爰は罵つ
ていふ
命の玉―零九
みち〜ビリ
るち骨―頸骨

高槻―城主水野
飛騨守

ちがふ。いひ合せし二人の連、つかくと寄て、「ヤイもさめ、此女郎此方へ囉ふ、置て歸れ。但東土産に川の泥水振廻はふか」と、兩方より立はさみ、投てくれんす面構。坂東者のどう強く、「何さぶいく共、人おどしの腕に、色々のほり物して、喧嘩に事よせ、懷中の物取と聞及ぶ。貧乏と云ふ棒に脛を撲られ、腰膝も立ぬ遊女狂ひ。上方の泥水より、奥勲者の泥足くらへ」と、つよと寄り蹴上る足首、はげがおとがひ蹴ちがへられ、どうとまろんでころ〜、小川へだんぶとはね落され、「是は」と取付かいしゆが大事の命の玉、縮み込程蹴付られ、「鳶がかけた南無三」と、惘れて空をみち〜。腹這ひ〜遊て行衛は無りけり。友達投させ見て居ぬ男、與倒まにうへてくれん」と、むづと掴めば振放し、「ヤちよございなけざひ六。ゑら骨ひつかひて呉れべい」と、くらはす拳を請外しては打返し、敲き合掴み合ふ。「なふ氣の通らぬ是どふぞ」と、中へ小菊がかせに入、「ア、怪我さしやんすな。大事の身」と花車が圍へば、下女も手を引立隔つ。「そりや喧嘩よ」と諸人の騒ぎ。茶屋は店を仕廻ふやら、二人は絶躰絶命の、打合組合、堤の片岸踏み崩し、小川にどう〜落ちわかれ、藻屑泥土まひこみ砂、互に投げかけ攫かけ、打合打付、汲ひ手無き相手勝負、氣根比三重と見へにけり。折こそあらめ、島上郡高槻の

濃柿―紺色のこ
らも沛艾―躍り上る
馬(文選)

二字―武士の事

つめやう―はめ
やう

家の子、お小性達の出頭小栗八彌、馬上に上下御代參の徒士若黨、揃羽織の濃柿に、智惠の輪の大紋。手振の先供はいくくくの、聲をも聞ず與兵衛が、たぐりかけて打つ泥砂。出合拍子に馬上の武士の、拾上下皆具迄、ざつくと懸るも時の運。栗毛忽ち泥付毛、沛艾鞍もしづまらず。與兵衛もはつと驚く所、「それ逃すな」と徒歩の衆、ばらくと取まく中、相手は川を渡越し、小菊も花車も手ばしかく、參りの諸人に紛れての、徒士頭山本森右衛門、與兵衛が兩脛かいてぎやつとのめらせ、膝を背骨にひしぎ付る。與ア、お侍様、けがで御座る御免成ませ。お慈悲く」とほゑ面かく。森「こいつ慮外者、お小袖馬具に泥をかけて、怪我といふては濟ぬ。面を上げ」と首ねぢ上、與ヤア森右衛門殿伯父じや人」森「ム、與兵衛めか」と互にはつと驚きしが、森「ヤイをのれは町人、いか様の恥辱を取ても疵にならぬ。旦那より御扶持を蒙り、二字を首に懸たる森右衛門、慮外者を取て押へ、甥と見たれば猶助けられぬ。討て捨る立ませい」と、小腕を取て引立る。馬上の主人、「ヤイくくく、ヤイ森右衛門、見れば其方が大小の鞆口、つめやうが緩そうな。ふと鞆走つて、怪我でもして、血を見れば殿の御代參叶はず、歸らねばならぬ。下向迄は随分鞆口に心を付て、森右衛門供をせい」と森「ハアはつ」とお詞

いきかたー心意
氣

人せりー人込

けうとなげー物
邊や

けんー不愛
想な扱も出来ず

爰かりますー前
の茶屋を借る

く、「をのれ下向には首を打。暫の命」と突きはなし。「随分おちが目に懸るな」と、い
ひたけれども侍氣、聲せぬ夏の手振鷺。「はいくくく」武家のいきかたなづまぬ御
馬、足を早めて急がるよ。與兵衛うつとり、夢か現か酔たるごとく、「南無三伯父の下向
に切るよ筈。切られたら死ふ、死だらどふしよ」と、心は沈み氣はうはもり。逃てくれ
ふと駈出、「ハアかふ行ば野崎。大坂は何方やら方角がない。こつちは京の方。あの山は
闇峠か但比叡山か。どこへ行たらば遁れふ」と、眼も迷ひうろたへ、「ア、どふかせふ何
と」加賀笠、お吉と見るより地獄の地藏。與ヤアお吉様下向か。わしや今切らるよ助け
て下され。大坂へ連れていて下され。後生で御座る」と泣きおがむ。与、イヤこちやまだ
下向じや無いはいの。七八町行たれど、あんまり人せり。こちの人待合せに爰迄歸つた。
エ、けうとなげな、身も顔も泥だらけ。氣が違ふたか與兵衛様」與、尤々喧嘩して泥を攫
み合、はね馬に乗た侍に、其泥がかよつて、それで下向に切らるよ筈。頼みますく」と
と立去らず。与、エ、あきれはてた。親御達の病に成がいとしほい。向ひ同士のけんく
共ならず。茶屋の内借て振濯いで進せましょ。顔も洗ひ、とつと大坂へ歸つて 以後
を嗜ましやんせ。又爰かります。お清よ、父様が見へたら、母に知らしやや」と、二人

葭簀の奥長き、日影も正午に傾けり。「さぞや妻子が待らん」と、辨當かたけかたくに、姉の手を引ク豊島屋の七左衛門、喉が乾けど呑間も急ぐ、茶屋の前にて中娘、「アレ父様か」と縋り寄る。セヲ、待兼たか。母は何處に」と尋れば、母様は爰の茶屋の内に、河内屋の與兵衛様と二人、帯解て衣服も脱ででござんする」セヤア河内屋與兵衛めと、帯解て裸躰に成てじや。エ、口惜い目を抜れた。そうして跡はどふじやく」所「そうして鼻紙で拭ふたり洗ふたり」と、聞よりせき立七左衛門、顔色かはり眼もすはり、門口に立はだかり、「お吉も與兵衛も是へ出よ。但出ずばそこへ踏ごむ」と、呼はる聲に、言こちの人か。子共がお晝の時分も忘れ、何處に何してゐさしやんした」と、出る跡から與兵衛が、「七左衛門殿面くない。ふとした喧嘩に泥にはまり、色々お内儀様のお世話。是も七左衛門殿のお蔭、忝い」といふ小鬢さき、髪髭も泥まぶれ身は濡鼠、腹立ツやら可笑いやら、挨拶もせずセ、はお吉、人の世話もよい比にしたがよい。若い女が若い男の帯といて、そうして跡で紙で拭ふとは、尾籠至極疑はしい。餘所のことはほかにかして、サアく參ふ日がたける」言ヲ、く待て居ました。委い事は道すがら」と、姉が手を引おとは抱く、中は爺親肩車に、法の教も一ツは遊山、群集をわけて急ぎける。與兵衛

尾籠—不仕歸
ほかからかす—打
ちやる
ちと—妹婿
法—乗るにかく

とほん―茫然

泥をかくらぬ―
泥をかけられぬ

一人茶屋の見世、とほんとして居る所に、亭主を初め、あたり在所の者共五六人、「先から爰な人は参りか下向か。一ツ所にうろく」と、合點いかぬ。サア通つた」と追立る。折から「はいくく」の、聲に交はる轡の音。小栗八彌下向の徒歩立、與兵衛うろたへ遊損ひ、押わる供先伯父の目に、かよる不祥の出合頭、引捉へ捻すへ。但、最前は御参詣、今は御下向慎みなし。討て捨る」と、刀の柄に手をかくる。八彌待てく、森右衛門、その者討て捨んとは何故く」森、彼奴は最前の慮外者。他人ならば少々は見遁しにも致し、御免なされ下し置るゝ様の、取成をも申べき所、彼奴が母は拙者が兄弟、現在の甥、何とも助け難し」と申も敢ぬに、ハシテ其咎と云は何ごと」森、御尋に及ず、御服に泥を投かけ、御身を穢し汚したる科」ハイヤく、此八彌が身を汚せしとは心得ず。是見よ著類の何處に泥が付たるぞ」森、イヤ召替られぬ以前の御小袖」ハさればく、著換れば、泥をかよらぬも同前では有まいか」森、御意とは申ながら、已に御馬の鞍鎧も泥に染みお徒歩でお歸りなさるとは、旦那に恥辱を與ゆる、慮外者」と申上れば、ハ黙れく。馬の皆具には泥のかよる物故に、障泥といふ字は、泥をへだつと書く。泥のかよらぬ物ならば、何してへだつるといふ字の入べきぞ。恥辱も慮外も咎もなし。武士たる者の恥

名字に懸る一不義竊盜の如き名を汚す行

掲誦云々般若心經の咒文唵呼魯以下藥師大日如來の咒文油屋一あびらにかく山上講一吉野金峯山に登る講中

辱とは、只一滴の濁水も、名字にかよるは洗ふにおちず、すよぐに去らず。あれら躰の雞人、身が目からは泥水。泥より出て泥に染ぬ蓮の八彌、名字は汚れぬ助けてやれ」森「ハアはつ」と、又有難き御意を大事に、振る手を揃へ足そろへ、行列立てよぞ 三重

中之卷

掲誦くく、波羅揭誦、波羅僧揭誦揭誦く。波羅揭誦波羅僧揭誦、唵呼魯く旋茶利摩登枳、唵阿毘羅吽欠。おん油屋中間の山上講、俗躰ながら數度のお山、院號請けたる若手の先達、新きやくまじり十二とう組、吹出す法螺のかひくしけ成金剛杖、腰に腰當首に數珠、巾著代の水のみ、河内屋徳兵衛店前に立より、先達何と與兵衛内にかく。講中何事なふ、お山勤めて有難い。今日の下向は知れた事。念比な友達は、桑津迄迎ひにじや。お主人見へぬは氣色でも悪いか。忝い御利生見て來た。是が土産先話さふ。西國者とやら、兩眼つぶれた十二三な旨が、大願かけて山上し、行者様を拜む中、兩方共にくはつと開き、小篠の坂を杖もつかず、つよと下る。お山の衆が考へ、ア、有がたい、此秋から世の中直る御告。あれ合點いかぬか。ちいさい盲は小盲、則米藏開いて、

下り口—米價の下り口

どろめ—道樂の與兵衛をさす次のどろくも同じ

一加持—佛力の加護を祈りて病を直す

やすくと下り坂は、下り口とのをしへ。手透なら夕方おじや。色々お山の咄して、旅の疲をはらそうぎやてい、ぎやてい」とのよめきける。親徳兵衛走出、「若衆下向か殊勝にござる。こちのどろめは山上参りの行者講のと、今年も身共が手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫、以上十貫近い錢取て、どれどこに迎ひにも出をらぬ。神佛の罰も思はぬどろく者。友達がひに引しめて、異見頼みまする」といふ所へ、奥より母親兩手に茶碗、「なふく目出度下向、マア一ツづつ参れ。こちの與兵衛が、山上様へ嘘ついた其咎か、妹娘のおかちが十日計、風引て枕あがらず。醫者も三人替て今に熱がさめかね、節句は近付聲を入る談合極り、先からは急いで来る。何かにつて女夫の苦勞、皆與兵衛ののらめが、行者様へ嘘ついた祟、お若衆お佗の祈禱頼みます」と、しみぐ語れば講中の先達、「いやくお山の祟なれば、與兵衛に罰が當る筈。役の行者共いはるる佛が、若輩らしう何の側がかりなされふ。娘ごの熱病は又外のこと、その様な煩ひには、薬も醫者もいらぬ事。皆様知らずか、あんまり奇妙で、異名を白稻荷法印と申、今の世の流行山伏、與兵衛も定めし知つてゐよ。此法印を頼めば、本復はたつた一加持。是から直に立寄、頼むに否は有まい」と語れば悦び、母「ナフク」忝い。是も行者のお

願慶町一逆に對していへり

書出し云々一節季にて書田やら何やかやで忙がしい時分なればと也
もつけ一意外

思ふつぼ一思ひし通り

しらせ。私は醫者殿へ参ります、是で緩りとお休みく」と立出れば、先達いや我々も面々の、親々妻子の顔も見たし」互に無事で悦びの、貝吹く降伏惡魔を祓ふ眞言の、聲もちりぐばらぐばらぎやてい、おんころぐに別れ歸りけり。ぎやくな弟に似ぬ心、願慶町の兄河内屋太兵衛、用有けにも浮ぬ顔付。徳ヤ太兵衛來てか、おかちが氣色見廻か。書出し何か忙しい時分、見廻には及ぬ事」と、いへば太兵衛傍近く寄り、「母には道でお目にかより、立ながら委しう物語致せしが、高槻の伯父森右衛門様から、たつた今飛脚の狀に、もつけない事がいふて來ました。見さつしやれ跡の月、御主人の供して、野崎参りの折節、ごくだうの與兵衛めも参り合せ、友達喧嘩に攫み合ひやうし、御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを切殺し、ぬしも腹切合點の所、御主人の御了簡穩しく事相濟、歸つて後御家中、町屋是沙汰。のめくと頬さけて奉公ならず、暇を願ひ浪人し、四五日中に大坂へ下り、一度侍の立へき思案せずば、此ぶんで刀はさよれぬとの文射なり」と、いふよりはつと膝を打、徳扱こそな、何處ぞで大事仕出そふと思ふつほ、かてよ加へて、おかちが煩ひ、おちの難義。まだ此上に、どろめが何を仕出そふやら、分別にあたはぬ」と頭をかけは、太イヤ分別も何もいらぬ、追出して退さつしやれ。ぢたい親仁

あんだらめ一痴
をいふ(假言集
覽)

尻のほどけた云
云一尻から探け
る

様が手ぬるい。私と與兵衛めは、お前の種でないとして、あまり御遠慮が過ぎます。腹
に宿つた母者人と連添ふお前、眞實の父と存る。やがて聲を取程脊丈伸びた、おからは
打擲きなされても、あんだらめには拳一ツ當すはたへさせ、萬事に遠慮が皆身の仇。た
たき出して此方へこさつしやれ。どれぞひどい主にかけ、ため直してくれませふ」と、い
へば親は無念顔。徳「エ、口惜い。尤繼父なれば逆親は親、子を折檻するに遠慮はない筈
なれど、そなた衆兄弟は、身共が親方の子。親旦那那往生の時は、そなたが七ツのらめは
四ツ、「坊さま兄様」「徳兵衛どうせいこうせい」と、いふたを彼奴が急度覺て居る。鼻
も始めはおか様の、内儀様のとていふた人。おち森右衛門殿が了簡で、「そちが家を見捨て
は、後家も子共も路頭に立。兎角森右衛門次第に成てくれ」と、だんくの頼みゆへ、
親方の内儀と此如く女夫になり、親方の子を我子として、守立し甲斐有て、そなたは自
分の獨かせぎもめさるよ。與兵衛めに商賣の手を擴けさせ、手代も置き倉の一軒も立る
様にと、あがいても尻のほどけた錢ざし、籠で水汲む如く跡からぬけ、壹匁もうければ
百匁遣ふ根性。異見一言いひ出せば、千言でいひ返す。エ、元が主筋下人筋の親と子、
釘ごたへせぬ筈。身の境界が口惜い」と、齒をくひしばれば、本サア此方の其正直を見抜

したい甲斐し
たいまま

如來かけてー如
來に誓つて
づつないー切な
い苦しい(但言
集覽)

汗けなつー身に
は夏の如く汗か
けども襦は涼し
い
山ぶー山伏の略
首かけー首を賭
する

て、どろく者めがしたい甲斐に踏付る。親仁様の蔭でこそ、親子三人はしにも寢ず、人の門にも立ず、名跡立て下された、其恩徳は本の親にも變らず、と毎度母も其の悔み。不共に遠慮あるからは、現在腹に宿した母にも、氣兼が有かと、思はぬ心置かるよ。因果ざらしの物にならずに飽果てた。太兵衛頼む、江戸長崎へも追下し、死をらば死に次第、二度面も見とふない。みぢも愛著残らぬ、と如來かけての母が云分からは、何御遠慮勘當なされ」と評議の聲に目を醒し、「ア、づつ無い母様く。かゝ様は未歸らずか」とおかちが苦しむ屏風の内。門には「物もう、河内屋徳兵衛殿は此方か。山上講中頼みに付、稻荷法印御見廻申」と案内す。太扱はおかちが祈禱なさるとか。一だんく。私は高糊の返事が急ぐ。お暇申す」と表に出、太徳兵衛宿に罷ある。早々御出忝し。あれへお通り遊ばせ」と、太兵衛歸れば法印は、端の間にこそ通りけれ。踏締も無く世の中を、すべり渡りの油屋與兵衛、賣溜錢は色狂ひ、絞り取れて元も利も、かすも残らぬ油桶、重けに見せる汗はなつ、中はすどしき明櫛を、擔ふて宿へ歸りしが、與「ヤ珍らしいお山ぶ、こなたは見知た白稻荷殿、妹が病氣祈の爲か。あの付物が其方衆の祈でのいたら、此與兵衛が首かけ。母者人は藥取にか。著婆でもいかぬ死病、いはれぬ氣骨をらる

番婆—釋迦時代の名醫
いはれぬ—無益

四ツ寶—四寶銀

引あは—引負ふ

どんな—鈍な

る。ヤこれ親仁殿、おかちが煩ひより、何より大事が有。其當座に母者人にはいふたれど、夫よりはつたりと打忘れ、今日ふつと思ひ出し、商賣やめて歸つた。跡の月野崎で、おち森右衛門様に行合、「わざく飛脚もやる所、幸ひの便親達へいふてくれ。主人の金四ツ寶三貫目余り引負ひ、此節季にたてねば、切腹かしばり首、一生の無心。兄太兵衛は義理も法も知らぬ奴。沙汰なしに三貫目調へ、與兵衛に持せて下され」と段々の言傳。二貫目や三貫目で伯父に腹切せて、こなた衆の外聞世間が立まい。今日は二日、際といふて明日明後日。萬事を指置き今日の中、三貫目調へて渡さつしやれ。あす夜明にかけ出せば、晝迄に往て戻る」と、たつた今直筆のおちの文の裏表。憎く可笑く、篤如何な伯父でも、主の金引あほ様な侍、腹切らせたがまし。何じやこだくさんに三貫目。三匁もおじやらぬ。お主が商賣、去年から一文も見せぬ。算用したら、三貫目や四貫目は残る筈。やりたくば其金やれ。追付聲を呼び入る大事の娘が病氣、どんな評定する隙がない。ヤ法印様お侍遠。おかちが様躰、御覽なされ下され」と、餘のこといふて取あはず。與ヲ、く手柄に聲が呼れふば呼ふで見や。見物せふ」と親の前に足踏伸し、そろばん枕の胸算用、ぐはらりと違ふて見へにけり。父がそろく抱起す、おかちが顔の面

跡の月一前の月十五日は阿彌陀如来の日

比較一冷ま

愛宕一頭
阿闍一足
白髭一老に皆かけたり
骨牌云々一骨牌の繪とりには麻布の明神を祈る、麻布にて製する故
どう取一博奕の
どう取には數の
つくり明神を祈る
さがり一廉價
持一富者

やつれ、法印とつくつと見、「ム、年はいくつ」又「十五」法「病付は」又「跡の月十二日」法「ム、薬師如来の縁日、十五はあみだ」と、懐中の書籍くりひろげ、指を折り、子細らしき聲付、「そもく、法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と薬師は御夫婦と云々。則此病は一時も早く掣殿を呼入、夫婦に成たいと思ふ氣病に、少外の見入有」と、いぶより徳兵衛尤貞。法印圖に乗り、「稻荷大明神の使者、白狐の教髪筋程も違はぬ祈、加持も薬同前。神佛にもその役く、熱病さまし冷すには、比叡山の廿一社、温むるには熱田明神、あたまの病は愛宕權現、足の病は阿闍佛、走り人盗人動かせぬは、不動の鐵縛、咳氣を祈るは風の宮、老人達の老病には、白髭明神白髮薬師、若衆の病の祈には、大慈大悲の地藏菩薩、骨牌の繪の付祈禱に、麻布の明神釋迦牟尼佛、どう取の祈は四三五六しや大明神、八ツこうなよの社。別て此法印が得物、錢小判俵物の相場商ひ、上ふと下ふと高下は自由。持のお方が價上したい祈には、強氣に上り高天が原の八百萬神、旗下衆のさがりを祈るは、高きお山を時の間に、籠に下る嵯峨の釋迦、安井の天神、持と旗と兩方一度の祈には高からず安からず中を取て、河内の國高安の大明神、法力のあらたなこと、棚な物取て來る如く、禮物は大方卅兩何時でも受取。いで一祈」と錫杖ふり立、いらたか

そとる言一たは
こと
急々如律令―道
士の邪を掃ふ咒
文の終りに唱ふ
る語

餘程にはたへ―
つけあがるも上

數珠、さらりくくと押もんだり。印をも未だ結ばぬに、病人重たき顔を上、かち「なふ祈も
いらぬ祈禱もいや。おかちが病直すには、掣取の談合止てたも。あの與兵衛が若氣故、
借錢に責らるよ、其苦しみが冥途の苦患。是ぞ呵責の責と成、ながれ勤の女子なり共、
與兵衛が契約の思ひ人を請出し、嫁にして此所帯を渡してたも。是非に掣を取なば、お
かちが命は有まいぞ。思ひ知たか思ひしれ」と、あたりをきよろく、睨廻し、「ア、づつ
ない苦しい」と、悶へわななきそどろごと。父は驚き色違へ、法印少もおくせず「汝元
來何處より來る。疾く去れ」。行者の法力つくべきかと、鈴錫杖をちりよんがら
く、「急々如律令」と責めかくる。與兵衛むつくと起き、「何を知つて去れ」。どう山
伏置おれ」と、落間にかはと突落せば、法ヤア山伏の法を知らぬか。印を見せずば置ま
じ」と、駈上りんく、鈴りんく、引ずり下せば又駈上る、不動の眞言どたくたぐはつ
たりばつたりだ。引ずりおろされ山伏も、錫杖がらく、命からく、歸りけり。與兵衛親
の傍に膝まくり、「是親仁殿、今のそどろ言耳に入たか。死んだ人を迷はせ、地獄へ落し
ても、此與兵衛が好た女房持せ、所帯渡すことは否かならぬか」鴛ヤイかしましいあた
り隣も有ぞかし、餘程にほたへあがれ。此德兵衛は、死んだ人の跡式とらいでも、五人

い加減にせよ

和御寮一もの
れ、敬語にあら

七人は、ゆるりと過る術しつたれど、年忌命日もとぶらひ、地獄へ落さず迷はせまい爲に、名跡ついで苦勞する。和御寮が好たお山請出し、女房に持せ、半年も立ぬ中所帶破つて、親方の弔ひもならぬ様には得せまい」與扱は是非掣取て妹に所帶渡すな」猶「ヲ渡す」與「ムウよふいふた道知らずめ」と立上り、俯ぶけに踏のめらし、肩骨脊骨うんうんくと踏付る。かちなふ悲しや淺ましい兄様」と、妹が縋れば、簀おかち構ふな。彼奴が腹のるる程、存分に踏しやく」と、身も働かず座も去らず。妹堪へかね、余りな兄様。私は何も知らぬ者。死靈の付た貞して、此よにくいふてくれ。それから商賣も精出し、親達へ孝行盡し、逆らふまいとの誓文立。それが嬉い計に、病ほうけた此なりで、こはいく恐ろしい、死人のまねして嘘つかせ、父様を踏つ蹴つ、それが親孝行か。年よつた父様目でもまふたら、それはく聞事じやないぞ」と、縋り取付泣わめけば、「いき女郎め、吐すまいと誓文立て口かため、憎いほうけた。死靈より與兵衛といふ生靈の苦しみ、覺えておれ」と同じくがはと踏伏せたり。「病疲れた妹を踏殺すか、畜生め」と、取付父親はつたと蹴とばし、與腹のるる程踏といふたな。是で腹をるるはい」と、顔も頭もわかちなく、さんぐに踏む最中、母立歸り、はつと計藥投げすて、

提婆—釋迦に刃
向ふ惡人

さすて引手—何
かにつけ

涙手のひま—涙
を手で拭ふに照
なし

與兵衛がたぶさ引攫んで、横投にどうどのめらせ、乗りかより目鼻もいはせぬ握り拳、
母「ヤイ業洒しめ、提婆め。如何な下人下郎でも、踏の蹴るのはせぬこと。徳兵衛殿は誰
じや、おのが親。今の間に脚が、腐つて落ると知らぬか、罰あたり。おとましやく、
腹の中から盲で生れ、手足かたわな者もあれど、魂は人の魂。己が五臓何處を不足に
生付た。人間の根性何故さけぬ。父親が違ひし故、母の心がひがんで、悪性根入るとい
はれまいと、さす手引手に病の種。をのれが心の劔で、母が壽命を削るはい。をのれ先
度も高槻の伯父御が、お主の金を引おひしと、よふもく此母を、ぬくくと欺したな
ア。たつた今兄太兵衛に行合、をのれが野崎のあばれ故、伯父は侍一分たよず、浪人
し大坂へ下るとの便。をのれが嘘が顯れた。其時母がつかくと親仁殿へ咄し、跡で知
れては、扱は親子の云合と疑はれ、夫婦の義理もかけはてる。内でも外でも己が噂
ろくなことは一度も聞かぬ、其度毎に母が身の肉を一すづつ、そいで取様な因果晒しめ。
半時も此内に置くことならぬ、勘當じや出てうせふ。出されくと打つとくはせつ、
たよく片手に押ぬぐふ、涙手のひまなかりけり。與此與兵衛が爰を出て、どこへ行く所
がない」母「チ、己が好たお山が所へ出てうせよ」と、小腕取て引出す。かちノフ兄様追

杓一天秤掃

出し、私は此跡取こといや。堪へて進せて下され」と取付ば、母「何知つて。退ておれ。是
 徳兵衛殿、きよろりと見て居て誰に遠慮。エはがひひ、殿き出してくれん」と、杓追取
 振り上げば、ひらりと外しひつたくり、輿此杓でわごりよを打」と、ばたくくと打つ
 くる。徳兵衛飛かより、杓もぎ取、つどけ打に七ツ八ツ、息もさせず打ちすへ、はつた
 と睨む眼に涙。鶴ヤイ木で造り、土をつくねた人形でも、魂入れば性根が有。耳あらば
 よふ聞、此徳兵衛は親ながら主筋と思ひ、手向ひせず存分に踏れた。腹を借た生の母に
 今の様。傍から見ると目も勿躰なふて、身が震ふ。今打たも徳兵衛は打たぬ、先徳兵衛殿
 冥途より、手を出してお打なさると知ぬかやい。おかちに入掣取といふは、跡方もな
 いこと。エ、無念な、妹に名跡繼せては、口惜と恥入、根性も直るか、一思案しての
 方便。あの子は余所へ嫁入さする氣遣ひすな。他人どし親子と成は、よくく他生の重
 縁と、可愛さは實子一倍。疱瘡した時日進様へ願かけ、代々の念佛捨て百日法華に成。
 是程萬面倒見て、大きな家の主にもと、丁稚も使はず肩に棒、稼ぐ程遣ひほつく。己今
 の若盛り、一働きかせぎ、五間口七間口のかど柱の主にと、念願を立てこそ商人なれ。
 たつた一間まなかの門柱に念かけ、母に手向ひ父を踏、行さき偽り騙ごこと。其根性がつ

日進一將軍義教
 に迫害せられし
 冠鑑日進上人
 百日法華一時
 日蓮宗に於る
 (俳言集覽)

遣ひはつく一遣
 ひ捨てる

うぢく云々
らば
怪顔一驚き怪
むかは

ひさし久しと
麻とかく
額一五月端午
寫一童兒一立一紙
備一羅山文集

づいたら、門柱は思ひもよらず、獄門柱の主にならふ。親は是が悲しい」と、わつと叫び入れれば、母、エ、もどかしい徳兵衛殿。石に謎かける様に口でいふて聞奴か。出てうせく。うぢくひろがば町中よせて追出す」と、又追取て母がつよばる杓の先、怖ひめ知らぬ無法者、町中といふにぎよつとして、と胸つきたる怪顔、「なふ兄様出してわしは跡に残らぬ」と、縋る妹を押留め、母、きりくうせふ。杓が喰ひたらぬか」と、振上こすり出されて、越ゆる敷居の細溝も、親子別れの涙川、徳兵衛つくくと後姿を見送りに、わつと叫び聲を上、御彼奴がかほ付背恰好、成人するに従ひ死なれた旦那に生寫。あれあの辻に立たる姿を見るに付、與兵衛めは追出さず、旦那を追出す心がして勿躰ない悲いはいの」とどうど伏し、人目も恥す泣聲に、憎いくも母の親、たしなむ涙堪へ兼、見ぬ顔ながら仰上り、見れ共余所の繪幟に、影もかくれて 三章

下之卷

吹きなれし、年もひさしの、蓬菖蒲は家ごとに、幟の音のさはめくは、男子持の印かや。娘計の豊島屋は、亭主は外の掛一まき、内のしまひと小拂ひと、油賣たり舞ふたりに

かどみの家一同
胞の家

掛一まき一掛取
一方にあせら
ゆづ妻櫛云々
古事記にゆづ妻
櫛を投棄玉ふと
あるより投げる
を思む
つげ一告と背搦
掛も十に云々
掛金も十軒の内
七軒は寄つたと
七左衛門とかく

うちがひ一底な
き帯袋

三人の娘の世話、まあ姉からと、櫛筒取出しときぐしに、色香揉込む梅花の油。女は髪より形より、心の垢を漉櫛や。嫁入先は夫の家、里の住かも親の家、かどみの家の家ならで、家といふ物なけれ共、誰世に許し定めけん、五月五日の一夜を、女の家といふぞかし。身の祝ひ月祝ひ日に、何事なけれ撫付て、髪引ゆづの妻櫛の齒の、言ハア悲し一枚折れた」惘れてとんと投櫛は、別れの櫛と忌ことを、と口にはいはず氣にかよる。何ぞのつけのを櫛かや。掛も十ヲに七左衛門、大かた寄て中戻り、言ア、思ひの外早い仕廻。内の拂ひもさらりとしまひ、兩替町の錢屋から、燈油二升梅花一合、今橋の紙屋から通帳持て燈油一升、當座帳に付てをく。まあ洗足して早ふお休み。明日はとふから禮に出さしやんせ」キいやく、早ふ休まれぬ、天満の池田町へ往ねばならぬ」言フウきやうとい最ふ宜はいの。池田町は北の端、近所の掛さへ寄たらば過てのこと」キこな人何いやる。節季に寄らぬ金の、過て寄た例はない。今日暮てから渡さふと詞つがふた。つい一走往てこふ。此うちがひに新銀五百八十目、財布の錢も戸棚へ入れて錠おろしや。やがて歸ろ」と立出る。言申々そんなら酒一ツ。姉それ爛して進じや」と、立て戸棚へ徳利から銚子へうつせば、キアこりやく、爛せいで大事ない。肴も盃もいらぬ、

とゞし一領は九
つなれば十歳に
はまだ届かぬに
かく
立酒一葬式に飲
む故
はかゆき一墓に
抄取をかく

こじり一鑑と切
追とかく

中がさ添て持て来い。夜が短かい気がせく。そこからつけ「姉あい」とは云へどどし
ては、手もとどかねば立上り、つぐも受るも立酒を、お吉見付て「そりや何ぞ、忌々し
い。子共は頑是がないにもせい、立酒のんで誰を野送り。ア氣味わる」と、いはれて夫
もちやつと腰掛取直し、七掛乞に行門出にはか行の立酒。此世に残らぬ」と、祝ふ
程なを哀世の、永き別れと出て行。母を見習ふ姉嬢、夜らの襖をしきくくに、歎、吳座よ
枕よ、蚊帳の釣手は長けれど、届かぬ足の短か夜や「姉おでんをろくに寢させて、母様
もちとおやすみ」といひければ、母「でかしかつた。父様もまだ遅かる。蚊帳の内か
ら表は母が氣を付る。我身もねとしや」姉「いゑ、わたしは眠たふござらぬ」と、い
ひつゝ眠るもおとなしし。此節季越にこされぬ河内屋與兵衛、手筈の合ぬ古拾、心計が
廣袖に、提たる油の二升入、一生さよぬ脇指も、今宵こじりの詰りの分別。勝手知つた
る豊島屋の、門の口覗く後より、「與兵衛殿じやないか」與「ヲ、與兵衛じやが誰じや」と、
振返れば上町の口入綿屋小兵衛。「アこなたは順慶町へ行けば、本天満町親御の所へと云
るよ、親御へのゆけば、「追出した爰にはるぬ」と有。貴様は留守でも判は親の判、新銀
一貫目、今宵延ると明日町へことはる」與「ハテ爰な人はいきかたの悪い。手形の表こそ

ひごう—非道

せつく—催促
眠たくと—眠た
くとも首縮る—眞綱で
首縮るの語をこ
る

一貫匁、正味は二百目、今夜中に濟せば別條ない約束では無いかいの「少」されば明日の明六ツ迄に濟ば二百匁、五日の日がによつと出ると一貫匁。元二百匁を一貫匁にしてとれば、こつちの徳の様なれど、親仁殿にひごうの金を出さするが笑止さに、こなた最貞でせつくぞや。今宵急度濟しやや「奥」小兵衛こりや念いるよな、河内屋與兵衛男じや「く」あてが有。鶏の鳴く迄には持ていく、眠たくと待てもらを「少」はて今宵すまして入用なれば、明日又直に貸はいの。此方も商賣、一貫目や二貫目は何時でも、其男氣を見届けた」と、詞で與兵衛が首しめる、綿屋小兵衛は歸りける。與兵衛見事に請合は請合しが、一錢のあてもなし、茶屋の拂ひは一寸遁れ、抜指ならぬ此二百匁。「有所には有ふがな。世界は廣し二百匁などは、誰ぞ落しそふな物じや」と、後を見れば小提灯、河といふ小文字は此方の親仁。「南無三寶」と、鎖たる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付身を忍ぶ。徳兵衛は氣も付ず、豊島屋のくどりそつと明け、「七左衛門殿お仕廻か」と、つよといれば、吉是は「く」徳兵衛様、此方のはまだ仕廻す、天満の端まで行かれます。私は取紛れお見廻も申さぬに、よふこそく。此際は與兵衛様の事に付、いかひお世話でござんしよ」と、蚊帳より出れば、簀「さればく、こなたは稚い娘御達の世話、我等は成人の

輕薄―浪從

思ひ切て―與兵衛を斷念す

何方も云々―何處も筋季で忙がしい
肌―着物

與兵衛に世話を焼く。何れの道にも子に世話やくは親の役、苦勞共存せね共、引付て一所に有中は氣も落付。あの様な無法者を勘當すれば、やけを起し、明日火に入も構はず、謀判似せ判、一貫匁の銀に十貫匁の手形して、一生の首禍かよる例も有事と思ひながら、生の母の追出すを、繼父の我等輕薄らしう留られず。聞ば順慶町兄が方に居るとやら。若此あたりへ狼狽て見へましたら、七左衛門殿御夫婦云合せ、父親はがつてん、隨分母に佗言いたし、どしやう骨入替、二たび内へ戻る様に、御異見偏に頼み入、こちらの女房お澤が一家一門皆侍。其習はかしか思ひ切ては見返らず、義理がたい生れ付。夫に似ぬ道樂者、本親の旦那もぎやうぎよく、義理も情も知つたる人。二人の子共に心をつくすは、皆古旦那への奉公。今與兵衛めを追出し、一生荒い詞も聞ぬ親方に、草葉の蔭より恨を受る、無果報は此德兵衛一人。推量なされお吉様」と、烟草に涙まぎらして、むせ返るこそ道理なれ。青ムウ思ひやりました。こちのも追付歸られふ、逢てお話しなされませ」雉いやく、何方も今宵のこと萬事のお邪魔。是此錢三百、女房が日良を忍び、つい懐へ入て出た。與兵衛めがうせたらば、追付正氣に赴き、さつぱりと肌物でも買いをれと、ゆめく我等の名を出さず、七左殿の心付かどう成共、御機轉頼み入」と

かま―曲つた母

きは―節季

ひづめ―苦め

さし出す。後の門口、「お吉様お仕廻か」と、をとづるとは女房お澤が聲。徳兵衛びつくり、「ハツ逢ふては氣の毒隠れたい。卒爾ながら御免なれ」と、かくるよ蚊帳のうしろ影。是々徳兵衛殿、我女房に隠るとは何事」と、聲かけられて夫も敗もう、お吉もどまくれ挨拶なく、そこには與兵衛、「サア母のかまがわせた。何いはるよ」とくるよの穴、耳を付てぞ聞るたる。女房お澤腰打かけ、「ナフ徳兵衛殿、七左衛門様もお留守といひ、内のことはそこくゝに。何時あはふと儘の向ひどし、互に忙しいきはの夜さ、爰へは何の用が有。悪性する年でもなし。ムウ又與兵衛めが事くやみにか。如何に糺しい子なればとて、餘りに義理過た。しんじつの母が追出すからは、こなたの名の立ことはない。此三百の錢のらめに遣るのか。つねぐゝに身をひづめ始末して、あいつに遣るは淵へ捨るも同前。其あまやかしが皆毒がひ。此母はそふでない。サア勘當と云一言口を出るがそれ限り、紙子著て川へはまらふが、油ぬつて火にくばらふが、うぬが三昧、悪人めに氣を奪れ、女房や娘は何になれ。サアくゝさきへいなしやれ」と、引立る袖をふりはなし、徳エ、嚙むごいぞやそふで無い。生立から親は無い。子が年よつては親と成。親の始は皆人の子。子は親の慈悲で立、親は我子の孝で立。此徳兵衛は果報少なく、今

死光―死後の光
しやかにまひ―
不詳

壁特―優艶男の
子にて佛弟子中
尤も愚物
阿闍世―父母を
殺さんとする惡
人(觀無量壽經)
あいだてなし―
差別なし
こうばり―願情
か

生で人は使はず共、いつでも相果し時の葬禮には、他人の野送り百人より、兄弟の男子に先輿跡輿舁れて、あつぱれ死光りやらふと思ふたに、子は有ながらその甲斐なく、無縁の手にかよらふより、いつそ行倒れのしやかになひが、ましでおじやるは」と、又むせ返るぞあはれ成。阿闍世と與兵衛め計が子では無い。兄の太兵衛、娘なれ共、おかちはこなたの子でないか。サアく早ふ先へ」と押出す。徳ハア去るなら連立ふ。そなたもおじや」と引立る、母の袷の懐中より、板間へぐはらりと落たは何ぞ。粽一わに錢五百。阿闍世「なふ情なや恥し」と、我身をおほひ押かくし聲を上、「徳兵衛殿眞平許して下され。是は内の掛の寄、與兵衛めに遣りたい計、わしが五百盗んだ。二十年添ふ中、隔心隔ての有やうに情けない。たとへあの惡人め、お談義に聞様な、殊利槃特の阿房でも、阿闍世太子の鬼子でも、母の身でなんの憎からふ。いか成惡業惡縁か、胎内に宿つてあの通りと思へば、ふびんさ可愛さは、父親の一倍なれ共、母が可愛い顔しては、へだてた心に、餘り母があいだてない。こうばりが強ふて、いよく心が直らぬと、さぞ憎まるよは必定と、態と憎い顔してぶつたよいつ、追出すの勘當のと、むごふつらふあたりしは、繼父のこなたに、可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智恵、許して下され徳兵衛

ひちなかり半字

落たる云々一極
が歟つて隔てた

殿、私に隠してあの錢を遣て下さる心ざし、詞ではけんくくと云たれど、心で三度戴きし。何を隠さふ、あいつは立派好もする奴。取わけ祝月鬢付元結を調へ、人交りもしたからふ。生れて此かた節句く、祝儀缺ぬに此月計、身祝ひもしてやりたさ。見苦い此恥辱を洒すも、お吉様頼んで届けん爲。まだ此上に根性の直る薬には、母が生肝を煎じて飲せといふ醫者あらば、身を八ツ裂も厭はね共、一生夫の錢金、文字ひらかなちがへぬ身が、子故の闇に迷され、盗みして顯れた。恥しゆござる」と計にて、わつと叫び入れれば、「道理々々」と夫の歎き、子を持者は身にこたへ、行末思ふお吉の涙、折からに泣く蚊の聲も、いとど涙を添へにけり。適「ヤ祝日に心もない泣わめき不調法其錢もお吉様頼み、與兵衛にやつてお暇申しや」と、いへ共女房涙にくれ、「こな様の遣て下さる其深い心ざしに、盗んだ錢がなんと遣りよ」適「ハテ大事なひらに遣や」選「いや許して下され」と、女夫が義理の遣るかた無さ。お吉も涙とどめかね、直ア、お澤様の心推量した。遣憎い筈、爰に捨て置しやんせ。私が誰ぞ能さそな人に拾はせましよ」選「ア、忝い逆ものお情、此粽も誰ぞ能さそな犬に、喰せて下さんせ」と、又泣出す二親の、心隔てぬくどり戸も、子の不孝より落ちたるくろよ、明て夫婦は歸りけ

とかく

裏間—内の様子
をそれとなく尋
ねる

まんが云々—仕
合が直る(俚言
集覽)

新でたつた云々
—幣の銀より價

り。父母の歸るを見て、心一ツに打うなづき、脇指抜て懐中に、さいたるくどりさらりとあげ、つよと入より胸もくろよも落付、奥七左衛門殿は何方へ。定めて掛も寄りましょ」と、余所の方から裏問ける。真誰かと思ふたれ、與兵衛様か。こな様は仕合な。後共いはすよい所へござんした。是此錢八百此粽、こな様へやれと天道から降ました。戴かしやんせ。なんほ浪人でも際の日寶、まんがなをろ」とさし出せば、與兵衛ちつ共驚かず、「是が親達の合力か」真ハテ早合點な、追出した親達が、なんのこな様へ錢金を遣しやんしょ」奥いや隠さしやるな。先前から門口に蚊に喰れ、長々しい親達の愁歎聞て、涙をこほしました「真ム、そんなら皆聞てか。よふ合點参りしか。他人でさへ目を泣きはらした。此錢一文も仇には成まい。肌身に付て一かせぎ、お二人の葬禮に、立派な乗物に乗せふと云氣が無ければ、男でもくるでも無い。夫を御背なされたら、天道の罰神の罰、日本の神々のさか罰が當つて將來がよふ有まい。先戴いて」とさし出せば、奥いかにもく。よふ合點しました。只今より眞人間に成て孝行盡す合點なれ共、肝腎お慈悲の錢が足らぬ、といふて親兄には云はれぬ首尾。爰には賣溜掛の寄金も有筈。新でたつた二百匁計、勘當の許る迄貸て下され」真それくく、おくを聞ふより口聞

値ある新銀二百
目の借金に僅か
八百文位の錢て
は追付かぬ故

不義になつて云
云一此一句千鈞
の重みあり

け、どこに心が直つた。嘘にも金貸てくれとはいはれぬ義理。世間の義理を欠いても、
金借て悪性所の拂ひして、跡から段々行こふでな。成程金は奥の戸棚に、上銀が五百
目余り、錢もありは有ながら、夫の留主に一錢でも貸ことはいかなく。いつぞやの野
崎参り、著物洗ふて進せたさへ、不義したと疑はれ、云ひ譯に幾日かよつたやら。なふ
うとましやく。歸られぬ内其錢持て、早ふいんで下さんせ」と、いふ程傍へにじり寄
奥不義に成て貸て下され」直ハテならぬといふにくどいく」奥くどふ云ふまい貸て下
され」直イヤ女子と思ふてなぶらしやると、聲立て叫くぞや」奥ハテ奥兵衛も男、二人
の親の詞が、心魂に浸こんで悲い物。弄るの侮るのといふ所へ行ことか。何を匿しませ
ふ、跡の月の廿日に、親仁の謀判して上銀二百匁、今晚切に借りました」直ヤ」奥まあ
跡を聞て下され。手形の表は上銀一貫目、借た金は二百匁、明日になれば手形の通り、一
貫匁で返す約束。夫よりも悲しいは、親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ、
先様からこととはる筈。今に成て此金の才覺、泣ても笑ふても叶はぬこと。自害して死ふ
と覺悟し、是懐に此脇指はさいて出たれ共、只今兩親の歎御不便がりを聞ては、死で
此金、親仁の難義にかくること、不孝のぬり上身上の破滅。思ひ廻せば死るにも死なれ

きつう—どうあ
つても
油二升—賣て錢
にする爲
つめて—はいる
だけ入れてあげ
よ

ず、生ては居られず、詮方なきに見掛ての御無心ぞや。無ければ是非もなし、有金たつた二百匁で、與兵衛が命を繼で下さるゝ御恩徳、黄泉の底迄忘れふか。お吉様どふぞ貸て下され」と、いふ目の色も誠らしく、そふした事もと思ひながら、かねての偽り是も又、其手よと思返して、「フウ、まがくくしいあの嘘はいの。まだ尾鯨付ていはしやんせ。ならぬと云ふてはきつうならぬ」與、是程男の冥利にかけ、誓言立ても成ませぬか。ハアはあ何とせふ借ますまい」と、いふより心の一分別。「そんなら此樽に油二升取替て下さりませ」「夫は互の商ひ内、貸借せいで世がたよぬ。成程つめて」と賣場にかより、消る命の燈火は、油量るも夢の間と、知らで升取柄杓取る、後に與兵衛が邪見の刀、抜て待て共見ず知らず。与、祝ふて節句も御仕廻なされ。こちらの人共割入て相談、有金なれば役に立まい物でなし。五十年六十年の女夫の中も、儘にならぬは女のならひ。必私を怨んでばし下さるな」といふ内に、燈油に映る刃の光。お吉びつくり、「今のは何ぞ與兵衛様」與、イヤ何でも御座らぬ」と、脇指後に押隠す。与、それく急度目もすはつて、なふ恐ろしい顔色。其右の手爰へ出さしやんせ」與、をつ」と脇指持かへて「是見さしやれ。何も無いく」といへ共、お吉身もわなく、「ア、こな様は小氣味の悪い、必傍へ寄ま

出合—サア来い
をとぼね—聲

あをち—斬つ事

さしもげに—挿
すとかく

をくれ—怖ろし
がり

い」と、跡退りして寄る門の口、明て辻んと氣を配れど、奥ハテきよろ／＼何おそろしい」と、付廻しく、「出合へ」とわめく一聲。二聲待ず飛懸り取て引締め、「をとぼね立るな女め」と、喉笛の鎖をぐつと刺す。刺されて惱亂手足をもがき、言「そんなら聲立まい。今死んでは年はもいかぬ、三人の子が流浪する。夫が可愛ひ死共無い。金も入程で御座れ。助けて下され與兵衛様」奥「テ、死に共ない筈尤々。こなたの娘が可愛程、己も己を可愛がる親仁がいとしい。金拂ふて男立ねばならぬ。諦らめて死んで下され。口で申せば人が聞、心でお念佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」と引寄て、右手より左手のふと腹へ、刺てはるぐり抜ては切。お吉を迎ひの冥途の夜風、はためく門の幟の音、あをちに賣場の火も消えて、庭も心も暗闇に、打まく油流るゝ血、踏のめらかし踏すべり、身内は血潮のあかづら赤鬼、邪見の角を振立て、お吉が身をさく劔の山。目前油の地獄の苦しみ、軒の蔦蒲のさしもげに、千々の病はよくれ共、過去の業病遁れぬ、蔦蒲刀に置く露の、たまも亂れて三重いき絶へたり。日比の強き死顔見て、ぞつと我から心もをくれ、膝節がた／＼がたつく胸を押しさけ／＼、提たる鑑を追取て、覗けば蚊帳のうちとけて、寐たる子共の顔付さへ、我を睨むと身も震へば、つれてがらつく鑑の音、頭

打とけ—中にか
く
せんだの木—栴
檀の木か
薄氷—戰慄の
状、小學にあり
四筋—新町の四
つの町は妓も揚
屋も國中無双
紋日が三々—紋
日には賢入があ
るから少しあ
れかしと也
忘八—揚屋の亭
主
變替云々—厄介
かけると變替す
る客もあれば頼
まれて勢よく隠
ずる客もあり
位—太夫天神な
どの位

の上に鳴雷の、落かよるかど肝にこたへ、戸柵にひつたり引出すうちがひ。上銀五百八
十匁、宵に聞たる心當。ねぢ込ねぢ込ふところの、重さよ足もおもくれて、薄氷を履火
焔踏。此脇指はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見へぬ沙汰、此世の果報の付時と、
内をぬけ出一さんに、足に任せて。三重をしてるや、浪華の春は京に負け、京は浪華の
景色より、劣るみな月なつ神樂、遊廓四筋は四季共に、散こと知らぬ花揃。妓の風俗揚
屋のかより、富士も及ばぬ戀の山、第一日本の名所なり。一年三百六十日、紋日が三日
足らぬとて、忘八はなげく、女郎は夫程客に厄介を、變替に行客も有、好んで頼み頼ま
ると、客は一際いかつげに、籠を飛する揚屋客、扇で忍ぶ茶屋の客、一座遊びは女房め
く。肩で風切からぞめき、位を問ふは田舎客、寐て物語る名染客、太鼓過てと呷くは、
女郎の手もめのふる廻客、親おや方の持客有、我身上の滅却有、飛脚も交り行通ふ、道
の間をしばらくも、口たど置くは恥らしく、役者物まね地の物まね、小歌淨瑠璃口てん
がう、西口東口々に、行も歸るもさはりなき、夕べくの大寄は、豊成世のいさをしな
り。されば山本森右衛門、與兵衛が身持の知せに驚き、暫く主人に暇請ひ、大坂へ立越
へしが、女殺して金取しも、慥に夫とは知れぬ共、衆目の見る所、與兵衛に指差す身の

ひんしゃん—も
てんば

放埒、若やと詮義も密付ねば、先々尋ね廊の内、東口にて尋ねしに、そんじよ其處とは
教へしかど、何れも同局のかより。爰や備前屋、是や教へし備前屋のかど、見まがひた
たすみ居る折ふし、手にかさ高な文持て、西の方からくる禿。寮「是々物問はふ。備前屋と申
傾城屋はいづかた。其御内に松風殿と申傾城、御存じならば教へてたべ。我等當所不知
案内頼入」とぞかたくろし。秀フウ子細らしい物の云様、備前屋は此家、西の端に戸の
さいた、客の有局が松風様でござんす。コレお侍様、左の足上さんせ、ソレく又右
の足も上さんせ。ヲ、よふ上さんした。いかい世話の」と、弄てひんしゃん行過る。寮所
柄とて人に馴れ、エ氣軽い奴」と打笑ひ、教へし局に立寄れば、内に火影は有ながら、
戸口ひつしと立話たり。寮扱こそ客は與兵衛に極る。出るを捕へ逢はん物」と、待間程な
く戸を開き、編笠かづき立出る。すかさずむすどひん抱かゆる。女郎も續いて「こりや
誰ぞ。卒爾せまい」と引別る。寮「苦しからず卒爾で無い。をのれ與兵衛め、震れたらば
逢ふまいか」と、笠引ちぎり顔見合、寮「ヤアこりや與兵衛で無い人違。まつびらく面
目なや」と、腰折て手をすれば、きやつも忍びの戀やらん、うなづく計顔かくし、東の
方へ走行。寮「河内屋與兵衛に深い中と、音に聞松風殿。昨日にも今日にも、與兵衛は爰元

三のづー膝頭の
邊
君を待夜云々
松の落葉七にあ
る頃
頼もの雁一田の
面と頼わとかく
さうあうー相應

へ参らずか。氣遣の無い用事有て尋ねる者、隠されては彼が爲ならず。サア眞直が聞た
い〜」松「まちつと先に見へまして、是から直に會根崎へ、叶はぬ用とて御座りんした」
「何じや會根崎へ。南無三寶遅つた。拙者も跡から参らずば成まい。次手に、も一ツ尋
ませふ。五月の節句前か、後か、六月へ入ては漸六日。其間に爰元で金銀の拂ひ、金
澤山に使ふたことは御座らぬか。是も隠さずお知らせなされ」松「どふござんすぞ、金の
ことは存じやせぬ。やり手にお問なさりんせ」と、いひすて局についと入。藝「是は我等
不調法。よしそれとても與兵衛に逢へば知るよこと。道も知つたる會根崎へ、たつた一
飛一走り」と、尻三のづ迄ひつからけ、揉にもふでぞ三重歌君を待夜はよやよやよ、西も東
も南もいやよ。兎角待夜は北がよい」さきにも待は待ながら、こちからひたと行通ふ。
道の犬さへ見知る程、うつと拔せし河内屋與兵衛、小菊にあふせを頼もの鴈よ。新町の
花を見棄て蜷川。爰の花屋にたどり寄る。後家のお龜出迎ひ、「たま〜見へるお客にこ
そ、よふお出がさうあうなれ。與兵衛様は爰が家、ちと風變り御出を止て、戻らしやん
したか。小菊様呼びましや。内は上下座敷もつまる、濱の床几で大く酒盛。きり〜と
呑かけましよ。小菊様サア爰へ、行燈に油さしやや。油の次手に油屋の女房殺、酒屋に

幸左衛門、文藏
―何れも當時の
俳優
ペリーしやペリ
の略

我―きさま

何がなしほ―何
かの機會に

仕替しかへて幸左衛門しやうざゑもんがするけな。殺手ころしは文藏ぶんざう憎にくいけな。與兵衛おとびゑ様まだ見みずか。小菊こきく様連つれましてちとお出いで。やれお盃さかづき持もてこい」と、たつた獨ひざりでべり立たる。與おと後家ごけたしなめ。ちと人ひとにも物もの云いせい。生うまれて與兵衛おとびゑこんなむさい床しやうど几ぎの上うへで、酒さけ呑のだ事ことなけれど今日は許ゆるす。東ひがし隣となり借かりり足たりして、與兵衛おとびゑが座ざ敷敷分ぶんに一いっツつこしらや。材木ざいこく諸色しよしき諸入目しよしりめ、見事みごとに我等わがら仕つかまる。きつい物ものか。エけびた此こゝ蒲鉾かまぼこの薄うすい切きり樣やうは」と、潜せん上しやうたらら。暴酒あはれさけ。しばらく時ときをぞ移うつしける。「與兵衛おとびゑ爰こゝに居ゐるか、知しらす事ことが有あて來きた」と、はけの彌や五郎ごらう床しやうど几ぎに腰こしかけ、「我われを侍さむらいがさがすぞよ」與おとヤやしてそりやどんな侍さむらいが」と、胸むねにきつくり横よこたはるも、心こゝろに包つつむ惡事あくじの塊かたまり。俄とたんに顛倒てんだううろく。眼まなこ、鼻はなハテはきよろくすないやい。昨日きのふから兄あにが所ところへ來きて居ゐる侍さむらいじやとやい」與おとア、夫それで落付おちついた。高槻たかつきのおぢ森もり右衛門ゑもん逢あふては難義なんぎ。爰こゝへ尋たづねて來きふもしれぬ。早はやふはづして逢あひともない」と、思おもへど急いそにも立たれねば、「何がなしほに」と見廻みまはしく、「ア、思おもひ出でした。新町あたらしちやうに紙入かみいれ忘わすれて來きた。中なかにうめく程金いれ入いれて置おいた。つい一いっ走はしり取とてこふ。はけも來きい」と立た出でる。小菊こきく引留ひきどめ、「アざはくと何なにじやの。有あり所しよの知ちれた紙入かみいれ、明日あすなととらんせ」與おとイヤそふで無ない。ふところが重おもとふ無なければ、つんと遊あそぶ心がせぬ」と、袖引そでひき放はなし二人ふたり連つれ、根ねから忘わすれぬ紙入かみいれの、空齧からげ吐いてぞ急いそぎける。

花色—はなぢ色

變生男子—も吉
が來世に男子と
生れる願立、法
華經の句

熱い茶四五服香程の、間もすかさず森右衛門、行燈目あてに花屋の門口、「花車に逢ふ爰へく」と呼出し、「河内屋與兵衛が跡追て參つた。二階に居るか下座敷か、罷通る」とつと入。花は是々申、新町に紙入忘れたとて、たつた今お歸り」森「何だ歸つた」花「まだ梅田橋越か越さずか」森「是はしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が參り次第、酒でも呑せ爰に留置、早々本天満町河内屋徳兵衛方迄急度知らせ。只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄、吟味致せば五月四日の夜、大金三兩錢八百受取たと有。爰元へは何程拂つた。隠しては其方が爲にならぬ。眞直にいへく」花「私方へも五月四日の夜に入て、大金三兩錢一貫文」森「シテ其夜は何を著て參つた」花「廣袖の木綿袴、色は慥花色か、しつかりとは覺ませぬ」森「ムウよいく。はひれく」といひすてと、元來し道を引返し、又新町へと三重和讀變生男子の願を立、女人成佛誓たり。願以此功德平等施、切同發菩提心往生安樂國。釋の妙意、三十五日お逮夜の心ざし、お同行衆寄集り、勤も既に終りける。中にも同行中の老躰、帳紙屋五郎九郎、「昨日今日の様に思ひしが、早三十五日の速夜に罷成。廿七を一期として不慮の横死。平生の心立人に優れ、上人の御恩徳報謝の心も深かりし。此世こそ劔難の苦は有共、未來は諸々の業苦を除き、本願往生疑ひは

務ろ一佛名

もちかします
遣はしました

よも有まじ。此御さいそくに心驚き、彌一遍の唱名も悦んでお勤なされ。必歎せらるな七左殿。殺手も其内知ませふ。たゞ御息女の介抱が第一。先立人も夫をこそ満足」と、しめせば有がた涙ぐみ、七さやう共く。お吉がことは思ひ忘れ、是も如來のお蔭と、信心堅固に悦びを重ね、行住坐臥に稱名は欠かしませぬ。去ながら乙のおでんめは二ツ子、乳がなふてはと不便に存じ、死んだ翌日金付て余所へもらかします。姉はよふいひ聞せたれば合點して、香花のきれぬ様に佛壇について計りますが、なふ中娘めが朝から晩迄、母様くといふてほる居ります。是には困果ました」と、ちやつと後の壁向て、聲を呑だるすより泣。「尤さこそ」と同行衆も、濡さぬ袖はなかりけり。折節居間の桁梁、通る鼠の怪しからず、蹴立蹴かくる煤埃、反古をちらりと蹴落して、鼠の暴れば静りぬ。同行「ソレ何やら落た七左殿」七「誠にはは」と取上見れば、半切紙に一ツがき、十匁一分五リン、野崎の割付、五月三日と計にて、誰から誰への名宛もなく、色こそ變れ所々血に染つたる書出し一通。七「不思議の物」と手に取廻し、「是は誰やら見た手じやはいの」同行「我等もどふやら見た手の風」七「ア、河内屋の與兵衛く」「それよく」と四五人の、口も與兵衛に極まれば、思出して七左衛門、「誠に死た亡者が物語。四月十

そらさぬ顔一ぬ
からぬ顔

己がもめ一己が
使つた也、もめ
は物をつかふ貌
(色道大鏡)
まつこう一先づ
斯う

一日我等夫婦、野崎参り致せし日、かいしゆの善兵衛、はけの彌五郎、河内屋與兵衛三人連で、参りしと咄せしが、其割付に極た。お吉を殺手も大かた是で知ました。三十五日の逮夜に當り、鼠が是を落すといふも、亡者が知せに疑ひない。是も佛の御恩徳、ア、南無阿彌陀」とひれ伏て、悦ぶ心ぞ道理なり。氣味悪ながらおりくの、訪音づれも我仕たと、人はいはれじ覺られじと、一倍大柄そらさぬ顔。「河内屋の與兵衛でやす」とつよと入、奥つい三十五日の逮夜になりましたの。殺した奴もまだ知れず、氣の毒千萬。したが追付知れましょ」と、我と口からむかふの吉左右。七左衛門尻ひとつからけより棒追取、ギヤイ與兵衛、女房お吉をよふ殺したな。をのれは爰へ縛れに來たか。遁れはない」と棒振上る。奥、ア、七左衛門聊爾するな。シテおれが殺した其證據は「ギ、いふなく、野崎参りの割付、十匁一分五リンといふ書付、所々に血も付て、己が手に紛い無い。此外に證據が入か。同行衆捕へて下され」と、つかみつかん其勢。奥、南無三寶顯れし」と、突上る胸の動氣じつと押へて苦笑、「此廣い世間、幾人も似た手が有まい物でなし。野崎参りの入用はおれがもめ、割付も何にも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。をのれ等迄も同じ様に立騒いで何と仕をる」ギ、まつこうする」と、攫み付を取て投、寄ば蹴倒し

胸がいゝむなぐ
大裡一朝廷

きはづき云々
物がしみついて
剛くなつて居る

踏こかし、一世一度の力の出場。棒ねちたくり一振ふればわつと逃る、透を伺ひ逃んとすれば、「ソリヤ逃すな」と追取まく。小庭の内を追つ返しつ、二三四五ど透も見合せ、くどりぐはらりと逃出る。門の前に兩三人「どつこい捕た」と、胸がい攫んで捻すゆるは、檢非違使の別當大裡の廳の官人なり。跡に續いておぢ森右衛門聲をかけ、「最前より各表に立給ひ、家内の一々残らず聞届けられしぞ。必未練に陳するな。エ、是非も無やな。世間の風説、十人が九人をのれを名ざす。聞度に此おぢが心の中を推量せよ。事顯れぬ先遠國へも落すか、さなくば自害をすよめ、恥を隠しくれんと、新町曾根崎行ささきくを尋ねても、跡へ廻り跡へめぐり、出合ぬは己が運の極め。それ太兵衛其裕是へく。則五月四日の夜著し出たる己が裕所々のきは付こはどり。大裡の廳より御不審。只今證跡の實否、己が命生死二ツの界なるぞ。誰かある酒々」あつ」と云より銚子燗鍋、手々に引提けさらくさつとこほしかけ、かゝる甥持弟持ち心を碎く涙の色、酒しほ變じて朱の血潮。伯父甥顔を見合て、「あつ」とより外詞なく、惘れ果たる計なり。與兵衛覺悟の大音上、「一生不孝放埒の我なれども、一紙半錢盜といふ事終にせず。茶屋傾城屋の拂は、一年半遅なはるも苦にならず。新銀一貫匁の手形借り一夜過れば親の

ふつと一弗に
て少しも同じ

ひぐわん一悲願

千日一刑場に
ひかけ與兵衛が
死刑に行はれし
を知らず

難義、不孝の科物躰なしと、思ふ計に眼付、人を殺せば人の歎き、人の難義といふことに、ふつとと眼付かざりし。思へば二十年來の不孝無法の悪業が、魔王と成て與兵衛が一心の眼を眩まし、お吉殿殺し金を取しは河内屋與兵衛、仇も敵も一ツひぐわん。南無阿彌陀佛」と、いはせもあへず取て引敷、繩三寸に縛上れば、早町中が駈付く、すぐに引立引出す。果は千日千人聞、萬人聞けば十萬人、残る方なく世のかどみ、傳へて君が長き世に、清からぬ名や残すらん。

